328

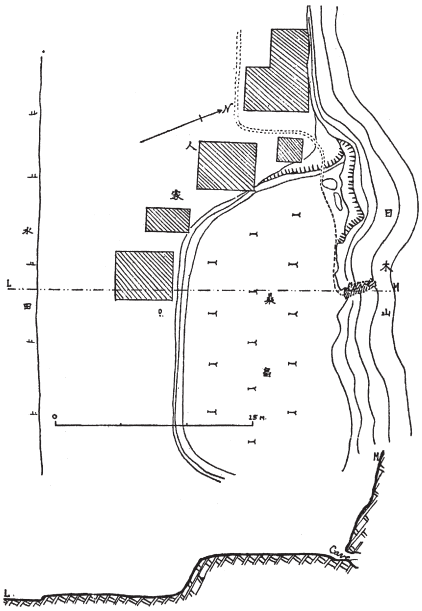
日木山洞穴

（姶良郡加治木町日木山字池袋）

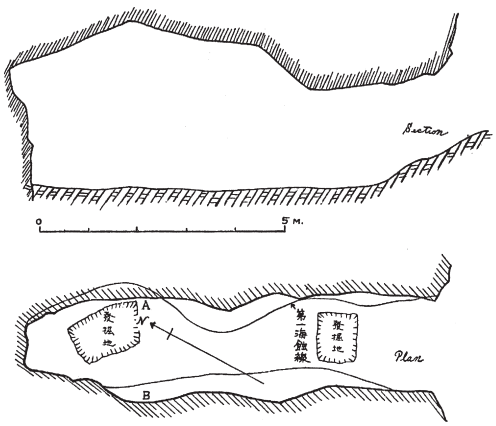
位置と環境

日木山洞穴は，加治木駅から東に約650m離れた地点で，加治木町と隼人町を結ぶJR日豊線の日木山トンネルの近くに所在する。

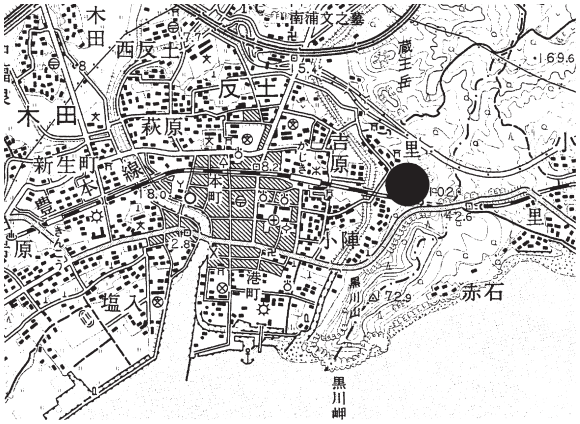
洞穴は，約20mの山腹にあり，急峻に立ち上がる凝灰岩の崖部の境に形成されている。洞穴の前にはテラス状に開けた土地があり，北側には，日木山の山塊が連なり，南側には錦江湾を望むことができる。東側は隼人町との境界に近く，西側には，近くを流れる日木山川や網掛川の堆積作用により形成さらた沖積第平野が開けている。



第２図　周辺実測図



第３図　洞穴平面図及び縦断面図



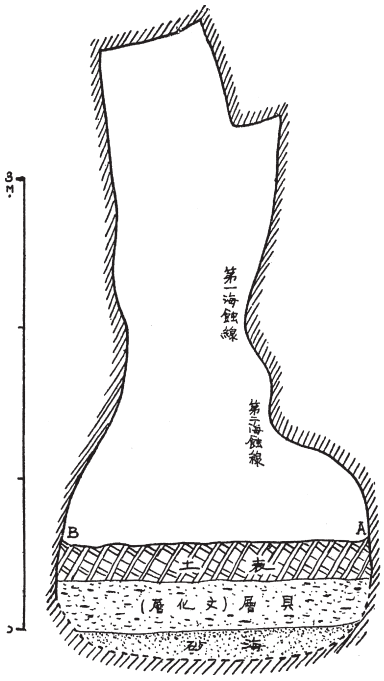
第１図　日木山洞穴の位置

調査の経緯

昭和12年，加治木町出身の野田昇平が日木山洞穴で採集した資料を持って，樋口清之を訪ね，これに興味を抱いた同氏が，同年８月，乙益重隆と伴に発掘調査を行った。発掘調査に費やした日数は１日間で，面積約１㎡のトレンチを洞穴内に２か所設けて調査にあたった（第３図）。

遺構と遺物

この洞穴は，海水による浸食と隆起により形成されたものと推測され，洞窟の平面形は，幅1.97m～2.20m，全長8.80mの東南に開口した細長い形状を呈し，高さは入り口付近で指定2.50m，奥は袋状



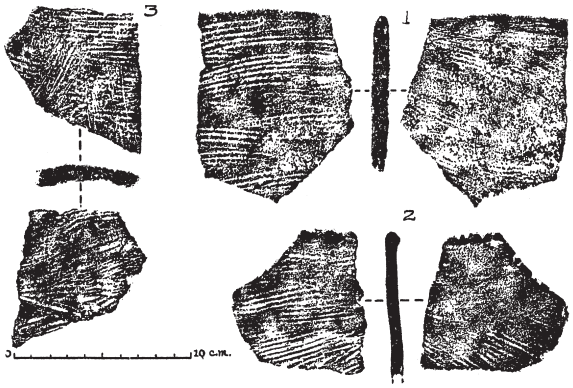
第４図　洞穴横断面図

に広がり最高3.40mを測る（第４図）。

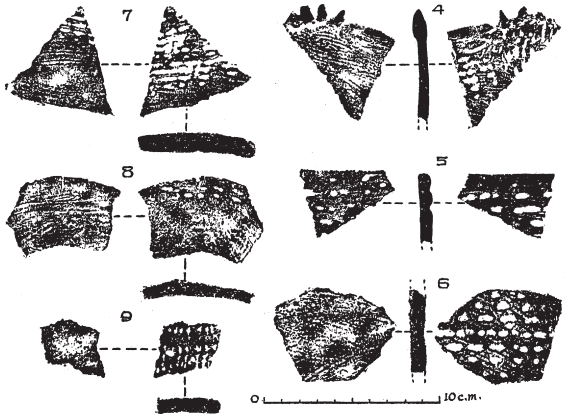
土層は３層に分けられて，第１層は，厚さ25cmの灰白色火山灰。第２層は，厚さ約30cmの黒褐色を帯びた火山灰層。第３層は，厚さ約20cmの海浜砂層である。

遺物は第２層から出土し，土器や礫のほかに多数の貝殻や骨片が出土しており，焚き火の跡と思われる焼土や木炭が水平に検出されている。

この時の調査報告書によれば，出土した土器は全て同時期の資料で，条痕文，点線文，相交弧文の３つに分類して「日木山式土器」として型式が設定された。

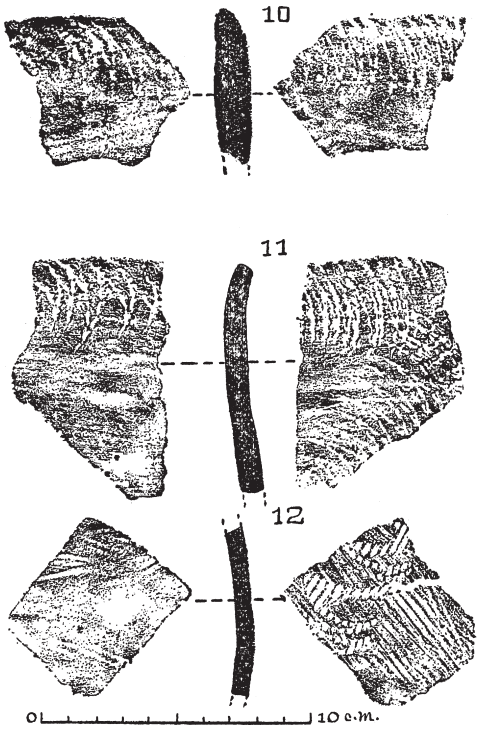


第５図　条痕文土器



第６図　点線文土器

出土品には，多量の自然遺物が含まれ，貝類はハマグリ，コシダカガンガラ，ウミニナ等の鹹水産で，炭化したカニ類のツメも見られる。また，哺乳類の動物骨は，シカ，イノシシに属するものである。



第７図　相交弧文土器

特徴

洞穴遺跡は，移動生活から定住生活へと発達する人類の居住形態の変化の中で，洞穴で生活した痕跡を残す遺構として重要なものである。これまで旧石器時代や縄文時代の古い時期の居住の研究に多くの資料を提供してきた。近年，南九州では縄文時代草創期の竪穴住居跡が発見される事例が増加しているが，洞穴遺跡はそのものが少なく，住居の変遷を研究するにあたり貴重な遺跡である。

また，小貝塚状に堆積した自然遺物層は，比較的南九州には少ない縄文時代の古い時期の貝塚で，自然環境等や縄文人の生業及び食生活等を研究する資料である。

資料の所在

採集品は，加治木町立郷土館に保管されている。昭和12年の調査報告に伴う資料は所在不明である。

参考文献

樋口清之・乙益重孝1937「鹿児島県加治木日木山洞窟遺跡の研究」『史前学雑誌』第10巻第２号

（関　一之）